

主水血笑録

柴田錬三郎



著者との
話合により
検印廃止

昭和35年10月20日 第1刷発行

もん ど けつ しょう ろく
主 水 血 笑 録

著者 しば た れん ざぶ ろう
柴 田 錬 三 郎
発行者 野 間 省 一
印刷所 豊国印刷株式会社
(浦野製本)
発行所 株式会社 講 談 社

¥ 140

東京都文京区音羽町3ノ19
振替東京3930
電話大塚(941) 大代表3111

© 柴田錬三郎 一九六〇

(落丁本・乱丁本はおとりかえいたします)

主水血笑録

柴田錬三郎





主 水 血 笑 録

柴 田 錬 三 郎

ロマン・ブックス

装
幀

御
正

伸

目次

青い右腕	一〇
伊賀屋敷	三〇
白狗斬り	五
因果図絵	七〇
裸女駕籠	八九
ゆらぐ時代	一〇八
如法暗夜剣	一三六
夜の柔肌	一四五
御鷹野異変	一六三
黄塵街道	一八一

主
水
血
笑
錄

青い右腕

(一)

宵に入って、風が落ち、春の満月が、澄んだ空に截りぬかれたように、美しく、かかっていた。

霽が降りていて、光は、それを透すかしているの、地上のものみなは、淡々とした陰翳にぼかされて、ふかい静寂にふさわしい。

立派な塀が、ながくつらなっている大名小路の、こ

こは、江戸でもいちばん森閑としたところであった。

うていた。

その枝が、急に、ゆれて、ひとつの黒い影が浮きあがったのは、意外だった、といいたところだが、ふしぎに、身ごなしの軽い、素早い行動が、音をたてず、この春夜の静けさを、みだすものではなかった。

黒ずくめのいでたちで、ぬすとかぶりの、これは、あきらかに、夜を忍んで歩く稼業の男であった。

とん、と地上へ跳んで降りると、ひくく、

「ふん。雛形の通り具足を干した晩——か。世は泰平だぜ」

すてぜりふをのこして、すたすたと歩き出していた。

それから、四半刻のうちには、この男は、湯島の聖堂のわきにあらわれていた。いつの間にか、着物を、おもてに着なおして、かぶりものも払って、普通の町人姿になっていた。

霧がうすれて、月かげが、鮮かに、男の頭上にそそいでいた。尤も、塀の影が、路面をふさいで、足もとは何も見えないのであった。

や、ぞうをきめて、この男が、口ずさむはやり唄は、粹^{いき}であった。

更けて、逢う夜の気苦勞は

人目をかねて格子さき

互いに見かわす顔と顔

目に持つ泪^{なみだ}、袖ぬれて

エコ 意地わるな、火の用心

はなす話も、あとや先

不意に、口をつぐんで、つと、塀蔭へ身を引いたのは、異常な嘖声がきこえて、地上が鳴ったからであった。

——なんだ？

せっかく忍び込んだ大名屋敷から、何も掠め盗らず

に去って来たこの男にとっては、せっかくの春の夜が、何事もなく明けるのがもったいなく思えた矢先であった。

異変がおこってくれるのが、有難いのである。生きているあいだは、神経を思うさまに自由に、やすみなく、いきいきと働かせていたのであった、この男は——。

数間さきの曲り角から、だだつと走り出て来た人影が、崖ぶちへ立って、向きなおった。

白刃をつらねて、追って来たのは四名の武士であった。

追いつめられた者は、まだ刀を抜いて居らず、両手をダラリとたらししていた。着流しの浪人ていで、月あかりにも、若い綺麗な貌^{かお}が、目立った。

追手方は、半円に散って、じりじりと間合をつめてゆく——。

凄じい殺氣をあびつつ、奇怪だったのは、浪人者が、それに応ずる鋭氣を、全く放っていないことだった。

彫像のごとく、ただ、うつそりと立っているだけであった。

物蔭から、固唾をのんで見^み成^{まも}っている男は、

どうしたんだ、これア？

と、心で叫ばずにはいられなかった。

次の瞬間、男を、がっかりさせたのは、浪人者が、急に、膝を折って、地べたへ坐ったことだった。

「斬られてもよいのだ、わたしは——」

くらい呟きを、その口からもらして、顔を伏せた。

「貴様——なんのざまだ！」

「いのち乞いか、たわけっ！」

「立てっ！」

追手方は、口々に罵りたけった。

浪人者は、そのまま、動かず、目を路面へ落していた。

「立たんか、貴様っ！」

一人が、出て、いきなり、その肩を蹴った。

からだ^みが反^そって、あやうく崖へ転倒しそうになったのを、左手で灌木をつかんで、辛うじてまぬがれた浪人者は、眸^{ひとみ}子をあげて、敵たちを見まわし、

「斬ってくれ、とねがって居る」

と、云った。

沈んだ、静かな声音だった。

「なにを、たわけ！ 斬られたくば、立って抜け！」

すると、浪人者のこたえは、奇妙であった。

「わたしには、もはや抜く力がない」

怯えて、それを訴えているのではなかった。自身に云いきかせるような、侘しげな孤独のひびきをもったものだった。

これをきくや、追手方は、さらに増して、烈しくたけり立った。

彼らは、この浪人者の水ぎわ立った手練ぶりを、たった今、目撃したばかりだったのである。

湯島天満宮の境内に、美しく咲いた桜花を、この武士たちの、主人が、眺めに来て、ふと、あくどい、いたずらを思いついたのであった。

侍女の一人に、樹にのぼって一枝折って来い、と命じたのである。

「衣裳をまとうて居つては、のぼりにくかろう。脱いでゆけい」

この趣向を思いついて、わがまま放縦な若い大名は、大いに満足であった。

ひたすらにゆるしを乞う侍女を、断じてゆるそうとはせず、他の侍女たちに、その衣裳を剥ぐことを命じた。

緋の下着いちまいになった侍女が、泣きしおれつつ、ひときわらんまんと咲きほこる大樹へ、むかつて、足をはこんだおりであった。

突然、つかつかと、近よつて来たのが、この浪人者であった。

無言で――抜く手も、みせなかった。ただ、右の袖が、ひらっとひるがえっただけであった。

浪人者がくると踵をまわして、二間を遠のいた時、桜樹は、地上三尺あまりの箇所から、幹を傾け、大きく口をひらきつつ、高みに拡った花冠は夜空を空けて、凄じい音響とともに、横倒しになったのである。

一颯して、直径五寸あまりの生幹を両断する――こんな神技は、目撃者でない限り、信じられないことだった。

いや、げんにその光景を目に映しつつも、人々は、

とつさに、神域を淫らごとでけがそうとした罰でも受けたように、居竦^{いすく}んで、立ち去って行く、浪人者の姿を、人間とは見ない自失ぶりだった。

主人自身が、茫然として、うつけていたのであった。

はっと、われにかえって、

「追って、斬れっ！」

と叱咤^{しった}した時、すでに、浪人者の姿は、境内から、消えていた。

だから、追跡した武士たちは、とらえて、白刃をつらねるまで、対手を魔性化身ではないかという疑念を抱いていたのである。

(二)

意外にも――。

追いつめられて、土下座し、刀を抜く力がない、と浪人者は、云った。あたかも、桜樹を両断したのは、天満宮の神力が与えられていたので、いまは、それが落ちた、とでもいいたいかのように――。

追手方は対手の強さに、必死の緊張をみなぎらせていただけに、この態度に対して、たけり立ちつつも、戸惑わずにはいられなかった。

――わざと、神妙にみせかけているのではないか？
突如、阿修羅^{あしゅろ}と化すのではあるまいか？

この疑懼^{ぎく}は、彼らの胸裡にあった。

だから、罵ったり、蹴ったりし乍らも、油断はなかった。

浪人者は、ついに、無抵抗であった。あらゆる侮辱に堪えた。

武士たちが、立去った時、浪人者は、しばらく、立ちあがれないくらい疼痛で、がくんとうなだれてい

た。からだ中いたるところを、刀で峰打たれ、足蹴にされていたのである。

齒をくいしばって、呻きを洩えつつ、起きあがろうとして、片膝立てた時、つと、それを、手助けたのは、終始を見成っていた例の男であった。

「かたじけない」

親切な町人と見て、浪人者は、礼を云って、その肩を借りた。

——どこかで、やすませてやらねばなるまい。家へはもどれねえ恰好だ。

と、男は、考えた。

稲葉小僧——という、この盗賊は、見成っているうちに、武士たちが気づかないことに、気づいていた。

浪人者の右腕は、あきらかに、中風でも患っているように、萎えていた。

刀を抜く力がない、と云ったのは、いつわりではな

かったのである。

ところが、武士たちは、浪人者が、たったいま、桜の大樹を両断した、と喚いたではないか。この腕前を持ち乍ら、何故に、立ち上ってたたかわぬか、と責めたのである。

——わからねえ話だ、こいつは……。

その不審が、稲葉小僧をして、浪人者を助けさせたといえる。

やがて——。

稲葉小僧が、浪人者をもなったのは、明神下同朋町の露地にある料亭の小座敷であった。

浪人者は、実は、この風体はしているが、旗本小普請組に籍を持つ鈴木主水、と名乗って、あらためて礼をのべた。年配は三十になるやならずとみえた。

明るい灯の中でさしむかってみると、主水の面立の秀麗さは、ちょっと比類がなかった。しかし、それよ